教授（マインツ大学）を招聘できたことは大きな成果であった。フェルテン教授には、中世教会史にかかわるテーマで三回、講演を行ってもらい、また二回の大学院生向けセミナーもしていただいた。いずれも、内容的に大変充実したものであり、参加者は大きな知的刺激を受けることができた。このフェルテン教授の日本における講演は、まもなく、甚野尚志編『中世ヨーロッパの教会と俗世』（山川レクチャーズ〈6〉、山川出版社、2010年5月刊行予定）として刊行されることも付記しておきたい。

パドヴァ大学の伝統と霊魂不滅の問題—16世紀世界における宗教と哲学思想

根占 献一

はじめに

本論は、2007年12月22日、東京大学（駒場）での口頭発表に基づき、霊魂不滅（不死）の視点から東西世界の16世紀を考察しようとするものである。口頭の際は、以下の四点、即ち、第一に15世紀後期のイタリアの知的状況を、第二に16世紀初めのラテラノ公会議の内容を、第三に所謂宗教改革以後のヨーロッパの一文献を、最後の第四に16世紀末の日本での一文献を、この霊魂不滅の問題との関連でそれぞれ検討した。ここでは、特に最初の二点を初めの三節に亘って記し、あとの二点は最終節で述べて、問題が世界的であることを明らかにしたい。

（一）ピエトロ・バロッツィとマルシリオ・フィチーノ

1489年5月4日、パドヴァの司教[1]ピエトロ・バロッツィ（Pietro Barozzi 1441-1507）は、この地の審問官マルティヌス（マルティーノ）・デ・レンディナラと協力して、パドヴァ大学の哲学教員とその学生に向けて、「知性単一説を論ずる者たちに反対する布告」（Edictum contra disputantes de unitate intellectus）を出すことで、知性単一論者たちに警告を発した。同論者たちは哲学上、個々人の霊魂不滅を否定する傾向があった。布告によると、その説は徳への超自然的報いと悪徳のもたらす苦しみを除去し、人々に最大の悪事さえ難なく行なっても良いと思わせるものであった。それゆえ、司教と審問官は知性単一に関する公開討論を禁じるとした。いかなる者も公に「賢いが邪悪なアヴェロエスの解釈によれば、アリストテレスの理論」と称することで、その立場を論じてはならないだろう、と結んだ[2]。

パドヴァは自由を掲げるヴェネツィア共和国の大学町として知られていた。著名な大学人としてニコレット・ヴェルニア、アゴスティーノ・ニーフォらを輩出し、西欧世界におけるアリストテレス哲学研究の一大中心地であった[3]。

先の布告は、大学で不定期に行なわれる公開討論の場で知性単一と霊魂不死を論ずることを禁じたものであり、通常の講義を行なう者にこれを禁止するとしたわけではなかった。実は、バロッツィは公開論争だけでなく、こちらの授業形態にも不満を持っていた。同共和国元老院あて書簡（1504年2月23日付け）から、「スコトゥスの道に従う神学の授業（lectura. スコティスト派の神学講

---

[1] 歴代の司教には著名な者が多く、たとえばピエトロ・バルボはのちのローマ教皇パウルス2世である。バロッツィの前にはヤコポ・ゼーノ、ピエトロ・フォスカリがいた。P. Ragnisco, *Nicoletto Vernia. Studi storici sulla filosofia padovana nella seconda metà del secolo decimoquinto*, Estr. dal Tomo II, Ser. VII degli Atti del R. Istituto veneto di scienze, lettere ed arti, Venezia, 1891, 264(24). ゼーノとフォスカリは書籍を愛する文化人であった。

[2] P. Ragnisco, *Documenti inediti e rari intorno alla vita ed agli scritti di Nicoletto Vernia e di Elia del Medigo*, Padova, 1891, 8-9. Id., *Nicoletto Vernia*, 638(48).

[3] E.P. Mahoney, *Two Aristotelians of the Italian Renaissance. Nicoletto Vernia and Agostino Nifo*, Variorum, Aldershot, 2000.

座）」では、「世界の永遠性、知性単一説、無からは無が生じることについて」（de eternitate mundi, de unitate intellectus, et de hoc quod de nihilo nihil fiat）が当然のように主張されているとして、現実を嘆いていることが読み取れる[4]。

ドメニコ派が 1441 年にパドヴァ大学教養部にトマス・アクィナスの講座を得たのに続いて、フランチェスコ派は 1471 年にドゥンス・スコトゥスの講座を獲得した。先の禁令布告の協力者マルティヌスはフランチェスコ派であった。バロッツィはパドヴァのスコトゥス派神学者たちに惹かれていた反面、先の書簡では彼らの思想的傾向を批判的に見ている。フランチェスコ派の間でスコトゥスは 14 世紀半ば以降に神学の第一位の博士として、これ以前に権威を有していた聖ボナヴェントゥーラとともに受容された[5]。

ところで、ラテンのアヴェロエス主義者たちが主張したように、霊魂不死に寄せる自分の信念を主張する際、哲学が個人の不死を拒み、証明することができないと述べることは異端ではなかった。哲学が霊魂不死を証明できることをスコトゥスは疑い、ウイリアム・オブ・オッカムは否定した。ドメニコ派修道会総長でもあり、枢機卿（1517 年）ともなるトンマーゾ・デ・ヴィオ（カイエタヌス）（Tommaso de Vio[Caietanus]1468-1534）は、アリストテレスの『霊魂論』注釈（1509 年）で、アリストテレスのこのプシュケーの学に従うなら、霊魂は死すべきものと結論づけた。アリストテレス『霊魂論』第 3 巻第 4、5 章はその曖昧な表現ゆえに、古代からルネサンスまで数々の学者、注釈者を悩ましてきた箇所であった[6]。

バロッツィの死後作成されたその蔵書目録からは、彼がボナヴェントゥーラのような、より古い世代のフランチェスコ派の神学者たちや、トマスを好んでいたように映ずる。彼らは期せずして、スコトゥスに反して、霊魂不死は証明可能とした。蔵書で注目されるのは、マルシリオ・フィチーノ（Marsilio Ficino 1433-1499）の数々の著書であり、プラトンやプロティノスの訳書である[7]。プラトン主義の伝統では、根本的に霊魂は不滅であった。

私はことあるごとに、ルネサンス・プラトニズムをヒューマニズムから区別しながら、イタリア・ルネサンスの文化や思想を考えてきた。フィチーノに代表されるプラトン主義運動は、ヒューマニズム運動の継続の一面もあるが、他方で異なった内容の文化段階を示している。この哲学文化は明らかに文学文化とは質を違えている。フィチーノ以前のヒューマニストたちは、反アヴェロエスの言説活動は取らなかった。例外はペトラルカくらいであろうが、その影響は彼の詩作に比較すれば、小さい。アヴェロエス説を格別の批判の的にしたのは、まさにバロッツィが愛読した（と覚しき）フィチーノであった。その主著『プラトン神学――霊魂不滅論』（Theologia Platonica de immortalitate

[4] P. Gios, *L'attività pastorale del vescovo Pietro Barozzi a Padova (1487-1507)*, Padova, 1977, 383. P. F. Grendler, Intellectual Freedom in Italian Universities: The Controversy over the Immortality of the Soul, in *Le contrôle des idées a la Renaissance*, édité par J.M. De Bujanda, Genève, 1996, 31-48, 特に 34.
[5] J. Monfasani, Aristotelians, Platonists, and the Missing Ockhamists: Philosophical Liberty in Pre-Reformation Italy, in *Renaissance Quarterly*, XLVI, 2(1993), 247-276, 特に 257-258.
[6] 根占献一「『プラトン神学』と霊魂不滅の伝統」、同編『イタリア・ルネサンスの霊魂論』三元社、1995 年、18-59 頁所収、特に 33-36 頁。
[7] Monfasani, *op.cit.*, 267-268.

animorum, 1482 年）にはアヴェロエス批判を展開する巻が含まれている。この 10 年後、1492 年に刊行されたプロティノス翻訳序文では、フィチーノは明確に、パドヴァ大学に偏向する、同時代のアリストテレス主義者を非難した[8]。彼らが皆、個人の霊魂不滅を否定するアヴェロエス主義者か、アプロディシアスのアレクサンドロスに従う者たちだったからであった。

（二）第五回ラテラノ公会議

このような文化的・思想的転換が次世紀初めのラテラノ公会議に結実するのであろう。16 世紀の 10 年代の同公会議の教書（constitutio）には、「信徒たちによって常に峻拒されてきた、特に理性的霊魂（anima rationalis）の本性、それが死すべきものである、あるいはすべての人間にそれが唯一であるという、きわめて有害な誤り、毒麦を主の耕地に蒔く者があり、（そのなかの）ある者は哲学者気取りで、この命題は哲学に従えば、真理であると見なしている」、と[9]。ここには、イスラムの哲学者アヴェロエスや知性単一論者の説と所謂二重真理説が示唆されている。

続けて、ラテラノ教書は、ヴィエンヌの普遍公会議と、その時のローマ教皇クレメンス 5 世の名を挙げながら言う。「同会議で宣言された規定（canon）では、知性的霊魂（anima intellectiva）は、まことにそれ自身でおよび本質的に（vere per se et essentialiter）人間の身体の形相として存在するだけでなく、不滅である。さらに、数多の数の身体にそれがひとつずつ（singulariter）注入されて、それは多数化され、またそうされるべきなのである。これが明確に福音から確定されるのは、主が＜かれらは霊魂を殺すことはできない＞［マタイオス 10 章 28 節］、また別のところで＜この世で自らの霊魂（anima）を憎む者は永遠の生（vita）ではこれを保つ［ヨハンネス 12章 25 節。共同訳では＜この世で自分の命を顧みない人は、それを保って永遠の生命に至る＞］と言われるときである。また、永遠の褒賞、そして永遠の罰を生の価値に応じて判断すると、主が約束されるときなのである［マタイオス 25 章 46 節］。そうでなければ、化肉とキリスト教の他の奥義がわれわれにはなんのためにもならず、復活は期待されえないこととなり、かつ、聖人と義人は（使徒［大文字で表わされ、パウロを指す］に従って）、＜あらゆる人間のうちこれ以上の惨めな者＞［コリントの信徒への手紙 I、15 章 19 節］はいないということになるだろう」、と[10]。

先のヴィエンヌの公会議の「霊魂は肉体の形相である」[11]という規定と同様、聖書的・キリスト教的伝統には見出し難い「霊魂自体の不死」は、ルネサンス期に高まったこの可否をめぐる議論と無関係ではないだろう。つまり、フィチーノの『プラトン神学』に見られるような、その強調の風潮と大いに関連があるであろう。ルネサンス哲学思想の優れた研究者のひとり、ジョヴァンニ・ディ・ナポリ師はそ

[8] Marsilii Ficini *Opera omnia*, Torino, 1962(Basiliae, 1576), II, 1537. P.O. Kristeller, *Die Philosophie des Marsilio Ficino*, Frankfurt am Main, 1972, 331.
[9] *Decrees of the Ecumenical Councils*, Original Text Compilers: Giuseppe Alberigo and Others, English Editor: Norman P. Tanner,S.J., Georgetown, 1990, I, 605. 公会議に関わる論述は以下の小論でも触れている。根占献一「イタリア・ルネサンスにおけるプラトン哲学とキリスト教神学」、『新プラトン主義研究』、新プラトン主義協会、第 7 号(2007)、31－38 頁。
[10] *Decrees of the Ecumenical Councils*, 605.
[11] *Ibid.*, 361

の大著『ルネサンスにおける霊魂不滅』で、このプラトン主義の隆盛と、今見た 1513 年の教皇レオ 10 世の教書「アポストリキ・レギミニス」(Apostolici regiminis)を関連付けた[12]。霊魂不滅説のルネサンス的強化がローマ教会に影響を及ぼして、16 紀初めに霊魂不滅が信仰箇条になったことは、この時代のプラトン主義復興の反映と言えるであろう。霊魂不滅論のスンマというべき『プラトン神学』中の第 15 巻は、「不敬虔な」アヴェロエスに対する反駁となっている。フィチーノはトマス同様に、信仰の理性的解釈は可能であり、また時代的にそれが求められていると考えていた。興味深いことに、教令には、先述のトンマーゾ・デ・ヴィオとベルガモ司教ニッコロ・リッポマーノが、哲学は神学的立場に拘束されてはならないという理由から反対票を投じた。

(三) ピエトロ・ポンポナッツィとイタリアの大学

引用には名指しされていないものの、パドヴァなど、北イタリアの諸大学で教えたアリストテレス主義者、マントヴァ出身のピエトロ・ポンポナッツィ(Pietro Pomponazzi 1462－1525)と彼の思想が批判され、否定されていると見ることができる。この教令発布以前の 16 世紀初頭から、ポンポナッツィは大学で霊魂の不滅がアリストテレス哲学に基づく理性的方法では断言できない、と講義していた。そして 1516 年には『霊魂不滅論』(De immmortalitate animae)[13]を世に出した。これはもちろん教皇教書に賛成して執筆したわけでなく、公刊後、多くの批判書が印刷に付された。それは題名からして間違っている、彼は霊魂の可死を説いている、という者もあれば、また彼をその不敬虔ゆえに異端審問にかけるべきだと主張する者も現われた。これにはポンポナッツィも別の書を二本こしらえて応えた。

このポンポナッツィの学的活動を知るには、先ずアルプス以北の大学、特にパリ大学とは異なる当地の大学の実態を知っておかねばならない。ここでは、教養部、学芸学部が目的の異なる神学部に抗して、哲学の権利を主張する必要はなかった。パドヴァを始め、ボローニャ、マントヴァ、フェッラーラ――彼が教えた諸大学であった――などは、法律と学芸・医学だけの学部で、独立した神学部は存在していなかった[14]。このため哲学は宗教、キリスト教のことを顧慮することなく、純粋に理性に基づく哲学的議論が可能であった。霊魂不滅の問題も、アリストテレス思想を究めることで、彼は信仰から切り離された同哲学の霊魂観を語ることができた。そして、イタリアのそれらの大学の場合、教養部は医学部と関連していたために、アリストテレスの霊魂が自然主義的に語られることが多かった。

このような大学の伝統はイタリアでは長く残り、17 世紀まで辿ることができる。チェーザレ・クレモニーニ(Cesare Cremonini 1550-1631)はその代表格である。彼は、ローマ・カトリック教会の権力とラテラノ教書の権威、それに旭日の勢いのイエズス会に屈せず、神学と異なる哲学の領域を守り、アリストテレスに基づく合理的思考の立場を擁護した。これがイタリア、特にパドヴァ大学の伝統であり、大学関係者も彼を支持した。またヴェネツィア共和国も彼に高い評価を与え、事あれば彼を擁護した[15]。

その教書も、霊魂の死滅性、あるいは単一性、世界の永遠性などの誤った考えを、大学やその他で公に講義する(omnibus et singulis in universitatibus studiorum generalium, et alibi publice legentibus)哲学者がいれば、それに反論し、できるだけ説得力ある論拠でキリスト教の真理を教えるよう、同じく哲学者に求めているのであって[16]、教授してはならないとは言っていない。

ポンポナッツィ思想はその根本にアリストテレス哲学を有するものの、生前の見返りとしての、死後の「正と善」(ゲーテの言)をキリスト教的な考え方から求めていない点で、ストア派の影響の大きい、人文主義的な、まさにルネサンス的な思惟であった[17]。果たして、彼が大学人として中立的・科学的立場で霊魂が不死か否かを論じたのか、そしてそれが立場の曖昧さゆえに所謂「中立的犯罪」(crimen neutralitatis)となるのかどうか、探究を進めなくてはならない。研究者マルティン・L・パインはその力作『ピエトロ・ポンポナッツィ――ルネサンスの急進的哲学者』で、その副題が訴えているようにポンポナツィが取った立場は、霊魂の滅亡、必滅であったと解釈している[18]。

(四) 異端者パレアリオとイエズス会士ゴーメスにおける霊魂不滅論

この最後の節で、拙論冒頭に述べた、第三、第四に言うところの東西の文献を紹介したい。一文献は霊魂が不滅か可滅かの問題が西欧の地域的特色をよく示し、他の文献はこの地域を越える、かなりの普遍性に至る経緯を明らかにする。

先ず、ヨーロッパの一文献とは、1570 年に異端として処刑されるアオニオ・パレアリオ(Aonio Paleario 1503-1570)作、リヨンで出た『霊魂不滅論』(De animorum immortalitate libri III, 1536)である[19]。これは、ポンポナッツィのように霊魂不死を疑っているのでなく、むしろこれを肯定的に捉え、ルクレティウスの『事物の本性(自然論)』(De rerum natura libri VI)に反論を加えている。パレアリオの論調は面白いことに、ここではローマ・カトリック教会の立場と異なっていない。ルクレティウスの描く世界には自然論的、原子論的因果関係が貫流し、神の摂理、奇蹟などが入る余地はない。ローマ教会から見ると、キリスト教的世界観と相容れず、認め難い著作の筆頭に位するのが『事物の本性』であった。

キリスト教世界の異端も時代とともに様々であろう。パレアリオは宗教改革以後の世界の中で、新約聖書の聖パウロのキリスト観に非常に惹かれた人物であった。ローマ・カトリックの体制に沿わず、その権威を受け容れなかったことが、異端とされた理由である。このことは新旧の優れた研究書が

---

[12] Giovanni di Napoli, *L'immortalità dell'anima nel Rinascimento*, Torino, 1963.
[13] Petrus Pomponatius, *Tractatus de immortalitate animae*, a cura di Gianfranco Morra, Bologna, 1954. Pietro Pomponazzi, *Trattato sull' immortalità dell'anima*, a cura di V.Perrone Compagni, Firenze, 1999.
[14] P.O. Kristeller, Die italienischen Universitäten der Renaissance, Köln, 18-19.

[15] L. Mabilleau, *Étude historique sur la philosophie de la Renaissance en Italie(Cesare Cremonini)*, Elibron Classics, 2006(1881), 17-61. Grendler, *op.cit.*, 42-45.
[16] *Decrees of the Ecumenical Councils*, I, 606.
[17] ゲーテの言に関しては、根占献一『ルネサンス精神への旅』創文社、2009 年、157-158 頁。P.O. Kristeller, *Aristotelismo e sincretismo nel pensiero di Pietro Pomponazzi*, Padova, 1983, 10-11.
[18] Martin L. Pine, *Pietro Pomponazzi: Radical Philosopher of the Renaissance* , Padova, 1986.
[19] 参照できたのは次の版に含まれているものである。Aonii Palearii Verulani *Opera*, Ienae, 1728, 631-702. 現代の校訂版は、*Aonii Palearii Verulani De animorum immortalitate libri III.* Introduction and Text, by D. Sacré, Brussel, 1992.

教えている[20]。彼の晩年にはトレント公会議が閉会を迎え、カトリック教会の姿勢はより鮮明になった。

このことは以下に述べる人物に於いても同様で、この公会議から大きな影響を受けた。同公会議の開始以前の 16 世紀前半と、断続的に 18 年間行なわれ、終結したあとの同世紀後半では、ヨーロッパは歴然たる変貌を遂げる。その人物とはペドロ・ゴーメス(Pedro Gómez 1535-1600)のことで、『イエズス会日本コレジョの講義要綱I』に含まれる彼の著作(編述)[21]が、次に紹介したい文献である。ゴーメスは、既に見た 1513 年の教皇教書「アポストリキ・レギミニス」(Apostolici regiminis)の公布以後の高位聖職者(イエズス会日本準[副]管区長)として、日本で霊魂不死をキリスト教の観点から理解してもらう必要性を痛感していた。この教書に関わる公会議の名も講義要綱には見られる。

こうして、霊魂不滅というプラトン的伝統に多くを負う、キリスト教的・ヨーロッパ的主題は、わが国の宗教思想世界にも挑むように登場したのである。フランシスコ・ザビエル来日(1549 年)以来、イエズス会士たちはゴーメスを含めて、肉体とともに霊魂が必滅するとして専ら現世の生のみを重んじる仏教教義に強い異論を唱えてやまなかった。それは、まさにラテラノ教書にある「永遠の褒賞、そして永遠の罰を生の価値に応じて判断すると、主が約束される」ことを反故にする思考法であったからである。ところが、哲学者ポンポナッツィは先にも触れたように、現世での賞罰に応じた「あの世」での神の報奨と刑罰に価値を置かない視点を打ち出していた。

東西の地域差から生じた文化・習俗の相違のままに世界が一体化する中、ヨーロッパ側の主張と問題点は、以上見てきた、ルネサンスでの前史を知ることで明瞭となった。霊魂不滅の問題は不滅を信仰の領域で考えるか、それとも大学の「自由」の中で哲学的に議論するかという立場がありえた。「切支丹の世紀」の日本で、先ず「東洋の使徒」ザビエルはこの地での大学人との議論を楽しみにしていた。ザビエルの父はボローニャ大学で学んだ知識人であったものの、息子はパリで長い学徒生活を過ごした。そこはイタリアの大学の知的伝統とは異なっていた。このために、彼の場合には「パリ方式」からその学識の形成を見なくてはならないだろう。他方で、ザビエルから始まった、主として宣教師との出会いから、当時の日本列島に住む人たちが何を学び、どのように彼らに反応、対応したかを知りたくもなる。果たして、ポンポナッツィのような世界観を披瀝する者がいなかったかどうか、あるいはそもそも東洋にも類似の思想がなかったかどうかは、今後の課題となる。東洋にもまた、西洋に劣らぬ長い思想的伝統があったからである。

---

[20] G. Morpurgo, *Un umanista martire. Aonio Paleario e la riforma teorica italiana nel secolo XVI*, Città di Castello, 1912. S. Caponetto, *Aonio Paleario e la riforma protestante in Toscana*, Torino, 1979.

[21]「アニマノ上ニ付テ」「アリストテレスのアニマについて三巻と自然学小品の講義要綱」、尾原悟編、キリシタン研究第 34 輯、教文館、1997 年。根占「イタリア・ルネサンスにおけるプラトン哲学とキリスト教神学」、33 頁。

＊Summary

NEJIME Ken-ichi, The Tradition of the University at Padua and the Problem of the Immortality of the Soul. The Religion and the Philosophical Thought in the Sixteenth-Century World.

I tried to consider the relation of the Europe to Japan in the sixteenth-century from the point of view of the immortality of the human soul.

Pietro Barozzi, most influential bishop of Padua, was never content with the teaching of the unity of the intellect at the faculty of arts there. The Averroist unity of the intellect did not acknowledge the immortality of the individual human soul. The bishop followed the thought of Marsilio Ficino, representative Platonist of the age, who emphasized the individual immortality in his principal work, Theologia Platonica de immortalitate animorum, published in 1482.

In 1513 its immortality became the article of the faith at the fifth Lateran Council in Rome. I suppose that it was influenced by the revival of the Platonism in the Quattrocento Florence, where Ficino lived and taught. Before and even after the year, Mantuan Pietro Pomponazzi,student at Padua in his youth and professor of the universities at Padua, Bologna and Ferrara, argued the possibility of the death of the individual soul of man, considering the soul from the theory based on the Aristotelian philosophy. The 'free thought' of the Italian university professors (for example, Cesare Cremonini) continued until the first decades of the 17 century. They were rational thinkers, independent of the theological and doctrinal thought.

In 1536, two decades after the Reformation, Aonio Paleario, eretico luterano, printed the hexameter poem and defended the immortality against Lucretius, ancient Roman pagan philosopher and famous writer of the De rerum natura libri VI. Interestingly enough, at this point Paleario's position was never contrary to the doctrine of the Roman Catholic Church. His contemporary but younger Jesuit by one generation than him, Pedro Gómez, earnestly taught the immortality of the anima at the collegium of the second half of the 16 century in Japan, as is shown in his Compendium, though he was Spanish Aristotelian. And moreover he vehemently criticized the Buddhism for his own interpretation that the religion of Buddha regarded the death of the human soul natural and inevitable.

I think that, believing in the western tradition, the missionary enforced not only the truthful of the Christianity but also the correctness of the Platonic theory on the Japanese people, both kirisitan (切利支丹、Christians) and non Christians. It was an interesting occurrence of history and an important encounter between the West .and the Far East.

中近世ヨーロッパのキリスト教会と民衆宗教

研究課題番号　19320013

平成 19 年度～21 年度科学研究費補助金（基盤研究 B）
研究成果報告書

平成 22 年 3 月

研究代表者　甚野尚志
早稲田大学文学学術院教授